

日吉台地下壕保存の会会報

第90号

日吉台地下壕保存の会

年頭にあたって

日吉台地下壕保存の会会長
大西 章

明けましておめでとうございます。本年もよろしくお願いします。

先日、アメリカの新大統領のオバマ氏の就任演説がありました。その演説の中で彼はアメリカには南北戦争や人種隔離などの暗い歴史があるが、それを直視し、困難さはあるがそれを克服していく新たな任務があると語っています。60年足らず前だったら地元のレストランで食事させてもらえなかったかもしれない父を持つ男が大統領になる。歴史を正しく認識するだけではなく、それを乗り越える新たな任務を喜んで引き受けるべきである。私たちの子供たちのまた子供たちに、私たちは試練のときに、この旅が終わってしまうことを許さなかったと語られるようにしよう。彼とは少し考え方が違うところもありますが、困難なことに立ち向かい、それを継続し続けることによって、初めて変化が生まれる。彼からエネルギーをもらいました。最近少々疲れも感じますが今年も1年間よろしくお願いします。

さて、この何年間を振り返ると保存運動も質的に変化してきました。我々の運動が保存から確実に活用になってきました。それは社会状況の変化もありますが、地道に見学会や勉強会などを続けてきた結果だと思っています。以前は見学会のガイドは2~3名で行っていましたが、最近では7~9名のボランティアの方々が積極的に参加していただいています。そして、その方々がみんな元気なのです。この元気さ、陽気さは大切なことと思っています。これから、このことを失わないような組織であり続けていきたいと思っています。また、1昨年に慶應義塾に申し入れた『日吉平和ミュージアム建設』を機会のあるたびに皆さんに広報しています。賛同してくれる仲間も増えてきました。困難さが伴うことですが実現できるように関係の方々と協力して進めていきたいと思っています。

また、昨年秋にマムシ谷体育館建設工事に伴い航空本部地下壕入口が新たに3か所見つかりました。今、慶應義塾ではこれをどのように取り扱うかを協議しているところです。我々としてはここを調査し、日吉台全体の軍事施設を明らかにしていくと、同時に、ここを整備して見学会などを通して幅広く活用したいと考えています。



慶應義塾 150 年ポスター(日吉地下鉄駅通路)

《日吉をガイドする》講座のお知らせ —日吉台地はこんなに多様でおもしろい—

2005年度からの3年間、港北区ふるさとサポート事業の支援をうけ、私たちは日吉の戦争遺跡ガイド養成講座をおこない、受講者の中から、数名のガイドが誕生しました。今年度は、この日吉台地を広く深く知るために、2つの講演を企画しました。自然地理学と近現代史の両面から、立体的で新鮮な「日吉」を知ること請け合いです。早春の一日、日吉キャンパス来往舎に是非お出かけください。なお5月には、考古学の分野から日吉をみる講演会をおこなう予定です。

講演Ⅰ 13時～14時30分

演題 「日吉台地の成り立ち—自然地理の学問分野から—」

地球規模の気候変化や過去の気温変化などから日吉台地の形成をみる

講師 松原 彰子 慶應義塾大学経済学部教授 地理学

講演Ⅱ 14時40分～16時

演題 「横浜と川崎の戦争遺跡にまなぶ」

日吉台地下壕・蟹ヶ谷通信隊地下壕・登戸研究所・陸軍62部隊など

講師 新井 揆博 当会副会長 戦争遺跡保存全国ネット運営委員

日時 2009年3月14日(土) 13時～16時

会場 慶應義塾大学日吉キャンパス 来往舎中会議室

参加費は無料、予約は不要です。

主催 日吉台地下壕保存の会

第16回横浜・川崎平和のための戦争展2008報告

亀岡敦子



戦争展展示風景

16回目の横浜・川崎平和のための戦争展は、慶應日吉キャンパスの木々が少し秋めいた10月9日から11日まで、来往舎を会場に開かれました。展示会場はイベントテラスと呼ばれるガラス張りのオープンスペースで、ゆるやかな斜面に不定形の平面があり、これがそれぞれのコーナーを区切ることになり効果的な展示ができました。外から見えるために散歩のついでに立ち寄った方、神奈川新聞を読んで駆けつけてくれた方々のおかげで、日吉も登戸もスタッフは説明に追われていました。展示内容は次のようなものです。

- ① 白井厚氏提供の戦時下の慶應義塾と塾生についての資料。特に映画にもなった最後の早慶戦に関する新資料が関心をよびました。②日吉台地下壕を中心とする写真と実物資料。今回初展示の終戦直後米軍が撮った航空写真により、キャンパスの空襲の様子も明らかになりました。③登戸研究所の写真と風船爆弾の十分の一の模型と、学生の研究発表など。登戸研究所の本格的展示は日吉では初めてだったので、じっくりと見ている人が大勢いました。④市民が描いた戦争の記憶を残すための絵画展は、この展示のひとつの柱になりつつあります。私も描いてみようかしら、とつぶやいていた声を聞きました。16年同じ展示をしているじゃないか、と思う方もいるかもしれませんが、毎回新資料が出ますし、コンセプトも違いますから、足を運んでいただきたいと思います。

11日の大会議室でのシンポジウムは、満員の参加者があり大盛況でした。午前の若者の発表「平和学の視点から」には2人の大学生、大学教員、ジャーナリストがそれぞれの立場からの質の高い発表がなされました。午後は白井 厚・山田 朗両氏の「大学における平和ミュージアムの役割」として新鮮な話題が提供されました。シンポジウムに先立ち、須田輪太郎氏が『きけわだつみのこえ』から上原良司の「所感」を朗読しました。上原の特攻出撃前夜に書かれたメッセージで、私たちは何のための戦跡保存なのか、何のためのミュージアムなのかを再確認できたように思われます。

数回の実行委員会と少ない人手で、毎年綱渡りのように行っている横浜・川崎平和のための戦争展です。回数を重ねるばかりで、どれだけの効果をあげているのかと問われれば、私は答えることは出来そうにありません。毎回数百人数十人であれ、戦跡について考える人が増えるだけでも、役目を果たしていると言えるのではないのでしょうか。そして、それを支えてくれているのは、賛助金を快く寄せてくださる皆様です。心からお礼申し上げます。



須田輪太郎氏『きけわだつみのこえ』から上原良司の「所感」を朗読。

平和ミュージアム作りの展望をめぐって

明治大学講師 渡辺 賢二

今年の平和展では、戦争遺跡の保存のあり方だけではなく、平和ミュージアム構想を検討したところに大きな特色があった。

シンポジウムではまず、山田朗氏(明治大学教授)が明治大学が設置する予定の陸軍登戸研究所展示資料館(仮称)の構想について報告した。設置の目的としては大学の平和教育・歴史教育・科学教育のためだとしている。戦時中、謀略戦のための研究・開発・製造の研究所だった施設の一棟を現状保存し、そこを展示資料館にするというものである。そしてそこに5室の展示室をつくりそれぞれの内容が明らかにされた。第一室は、陸軍登戸研究所とは何か、という資料が展示される。第二室は、陸軍登戸研究所が開発した風船爆弾を中心とした第一科の資料が展示される。第三室は、細菌兵器や謀略兵器を開発した第二科の資料が展示される。第四室は、陸軍登戸研究所が最も重視した偽造紙幣作戦を展開した第三科の関係資料が展示される。第五室は、陸軍登戸研究所が本土決戦との関



シンポジウム

係で移転した資料やここに勤務した人たちのアンケート資料などが展示される。

大学がこうした戦争遺跡を生かして平和ミュージアムとして開設するのは初めてであり、注目される。

次に白井厚氏(慶應大学名誉教授)からは、まず世界の大学がいろいろなミュージアムを併設しているのが常識であることが紹介された。とりわけイギリスやアメリカでは資料の収集・研究・教育支援がそこを活用して行われていることが詳しく紹介された。それに比して日本の大学がミュージアムを併設している例がきわめて少ないことが示され、その中でも平和ミュージアムについては立命館大学平和ミュージアムなど極めて少ないことが指摘された。その上にたって、慶應大学でも平和ミュージアムの設置が必要だとして日吉台地下壕保存の会が提起している提言を紹介した。それによると第一に、日吉の自然と歴史のコーナーを作ること。第二には、アジア太平洋戦争下の塾生生活コーナーを作ること。第三には、慶應日吉寮と谷口吉郎のコーナーを作ること。第四には、日吉の海軍と戦争遺跡のコーナーを作ること。第五に、展示資料館内には情報を公開する場を設置することなどとしている。そして南寮と中寮の間にあった地下壕へ直行する階段を復元し、地下壕見学のコースを設定する必要性も指摘した。

会場からもこうした戦争遺跡を生かした平和ミュージアムを設置する重要性が多数指摘され、戦争遺跡の保存と共に平和ミュージアム設置の画期的意義が深められた。

若者の発表「平和学の視点から」をきいて

亀岡敦子

横浜・川崎平和のための戦争展の特色をひとつ挙げてください、と言われたら実行委員の多くは「若者の発表」というプログラムです、と答えるのではないかと思います。初回からいちども途切れることなく続けているので、おそらく50人以上の若い世代が、一般の参加者を前に研究を発表し、シンポジウムで意見を述べたことになります。

今回は、立場の異なる4人の若者が、「平和学の視点から」というテーマに則して発言しました。まず、中央大学生の内山日花李さんが、戦争を考えるようになったきっかけは、大学のゼミで先輩の戦争体験を取材したことであり、さらに新聞社でのインターンシップ中に登戸研究所の見学記事を書いたことで深まったと述べました。そして事実を伝えていくことが、戦争体験者の心の中だけにある戦争遺跡を伝えられるのではないかと、結びました。つぎに専修大学生の益満隆行さんの「歴史史料として読み解く軍事郵便」の発表がありました。所属したゼミで軍事郵便をパーソナルメディアと捉えて解説していくうちに生じた自身の変化を語ります。そして戦地に赴いたのはごく普通の人々であることを実感し、その思いが、普通の人々が戦場という異常な空間に行かねばならなかった時代背景に目を向ける事につながるのではないかと結んでいます。

3人目の神奈川新聞記者の齊藤大起さんは、若者世代ながらまさに伝える立場にいる訳です。8月の自身の連載記事「記憶から記録へ」について報告し、感情に訴えかけようと歌い上げる記事ではなく、記憶を事実として確認し記録しそれを伝えることが、個人の記憶も伝えることになるのではないかと述べました。最後は三重大大学の研究員竹峰誠一郎さんで、昨年まで和光大学で平和学の講座を担当し、研究し教える立場にいる人です。「核実験場とされたマーシャル諸島はいま」というテーマでマーシャル諸島の現状を報告しました。そして見えないものを



若者の発表者の方々

見通し、足元の平和から世界を見つめる大切さを語りました。

短い持ち時間のなかで、濃密で地に足ついた報告がなされ、ほとんどが年長者の聴衆に感銘をあたえました。申し合わせたわけではないのに、感情に流されることなく事実を知ることこそが、戦争の記憶を継承する上で大切である、との結論に達していたように思います。若い世代がこのことに気付くと言うのは、なんと心強いことかと、賞賛の拍手を送ります。

登戸研究所と戦争展

登戸研究所保存の会 宮永 和子

昨年の11月16日～26日まで、明治大学生田図書館のギャラリーで、大学主催の「登戸研究所展示資料館」開設に向けてのプレ展示がありました。モノクロームの重苦しさを感じる展示スペースは、戦争の空気を醸しているかのようでした。

今回の「戦争展」のシンポジウムでは、この「展示資料館」について、明治大学の山田朗先生より、2009年秋以降に開設されることが、はじめて公式に報告されました。この時会場からは、木造棟についてと、開設に際しての大学側と「市民の会」との関係について、質問が出されました。大学自身が動き出し、新たな状況を生み出した時、地域市民として、どのような関係をつくっていけるのか、新たな課題です。

そして、そこで力となるのは実績です。日吉台地下壕と蟹ヶ谷地下壕の会の、着々と積み重ねられた内容と足跡を感じさせる、資料館構想を踏まえた展示からは、その実績が感じられました。対して登戸の会には、まだその実績がありません。今回、関連行事の一つとしていただいた「みどりと歴史遺産を生かしたまちづくり」と題したシンポジウムは、その足掛として、地元で市民活動をされている方々を迎え、60名の参加で11月1日、多摩市民館にて開催されました。地域交流を通して、まちを知り、まちの視点に立った「戦跡」の可能性を模索しました。

このような動きの予測された「戦争展」では、前回はじめて参加させていただき、学び考えたことと、登戸を見学に訪れた人たちの想いで展示構成しました。その共通した想いとは、「今、自分のできることは何か」という戦跡からの問いかけに、答えることでした。実物資料展示の行員手帳は、これまでの聞き取り証言の実証になり、第126号の表彰状からは、まだ眠っている「事実」を感じました。持ち主は、地元から勤めた人たちで、「私が持っているより、皆さんのお役に立てて下さい。」という言葉でした。

「戦争」に触れた時、分析するだけでなく、こうした体験者の託する想いがあることも忘れてはいけない。この「ひとの想い」こそが後押ししてくれた「戦争展」でした。



展示 中央に風船爆弾の模型

慶應義塾大学日吉キャンパス研究活動展示報告会
～「知」をめぐる社会との交流・協働キャンパス～

HRP : Hiyoshi Research Portfolio 2008 に参加して

中沢正子

11月14・15日に開催された標記の会（主催：HRP 実行委員会、日吉研究支援センター）に日吉台地下壕保存の会も参加した。展示会場は来往舎イベントテラスと2階の中会議室、206、

207号室。シンポジウムと講演会は大会議室、シンポジウムスペース、協生館の藤原洋記念ホールという大掛かりなものであった。

前日13日3時に集合して割り当てられた206号室の展示に取りかかる。2枚の特注パネルには本年の聞き取り調査で判明した日吉の空襲の概要をしるし、その下のテーブルには最近入手した日吉の航空写真(1947年撮影)と空襲により焼失した民家の地図を配置した。別のテーブルには戦争に関連した書物を並べ、壁面には地下壕、学徒出陣、日吉寄宿舎の写真や地図を配置し、手作りふうの展示場ができた。

当日14日は喜田さんだけが差し替えに来るはずだったのに、10時過ぎ数人が展示室に集まってしまった。説明文の修正をしたり、書物を追加したり皆意欲的に行動する。

15日10時半より大会議室で慶應義塾創立150年記念企画「日吉の過去・現在・未来」のテーマをきっかけ「日吉台地の成り立ちと先史時代以降の土地利用変遷」の内容で5人の発表があった。206、207号室の展示と関連づけられる内容で以下の通り。

日吉台地とヒトの結びつき～地理学・人類学・考古学の立場から～

- 人類学の立場 高山博(文教授)
- 地理学の立場 松原彰子(経教授)
- 考古学の立場 安藤広道(文准教授)
- 艦政本部地下壕の調査、連合艦隊地下壕の排土調査 桜井準也(尚美大教授)
- 日吉台地下壕の保存と活用 新井揆博(日吉台地下壕保存の会副会長)

発表で印象に残ったのは地球の氷期と間氷期がボーリングによる地質調査で裏づけられたという図表。地球温暖化が問題になっているが、地球の長い息づかいをどう捉えたらよいか考えさせられた。もうひとつは日吉周辺が大変住みやすい大地だったという説明。弥生時代最盛期には1000人位が住んでいたそうだ。高等学校のグラウンドの先に保存されている弥生式住居址は大きな住居であるし、古墳時代の観音松古墳、白山古墳は展示の地図でみても大変立派なものである。豊かな土地でなければ現在にまで残る建造物はつukれないのではないかと思う。

弥生式住居址は三田史学会の慧眼によって今にその一部が保存されているが、観音松古墳は削りとられてしまった。白山古墳もしかり。日吉台地下壕について発表の機会が与えられたのには、現代の遺跡として残さねばならないという思いが、HRP2008運営委員会の方々にあったからだと思う。短時間の発表で押し押しになった最後に新井副会長が気持ちを込めて地下壕の保存と活用について述べられた意義は大きい。

この日午後1時にはHRP主催の地下壕見学会が予定されており、案内を依頼されていた私達はおにぎりを頬張って教員室前のC会場に駆けつけた。申込まれた40人余の参加者が待ち受けていた。学生、教職員、一般の方と混成チームのようであった。

見学会は定例会の通りにガイダンスを行ない、第1校舎、地下壕、教会、弥生式住居址、耐弾式堅穴坑、寄宿舎と進み、最後にC会場にもどり質疑応答、まとめを行い散会した。ある参加者の感想は「噂には聞いていたけれど地下壕に入るのは始めて。日吉キャンパスの丘を歩いたのも始めて。寄宿舎のことなど殆ど何も知らなかった。今日は土曜日で休日だったし、ほかの予定がなく申込んでよかった」と。

今日の見学会は若い方が地下壕に関心を寄せられ、熱心に話を聞き、黙々として見学されたし、この日都合がつかず、後日の見学会に参加された先生がいらっしやったり、標題の通り『「知」をめぐる社会との交流・協働キャンパス』の役割を十分に果たしたのではなかろうか。



展示 日吉の空襲の概要

横須賀の戦争遺跡見学会 行われる。(盛会裡に2回実施)

2008年9月21日(土) 第16回横浜・川崎平和のための戦争展イベントとして猿島・観音崎砲台群見学会が約30名の参加者を得て行われました。横須賀中央駅に集合後、三笠港から船に乗って猿島に渡り、レンガ造りの洋式要塞跡、砲台、トンネルなどを見学しました。明治から大正期にかけての猿島の軍事的な位置づけなど講師の新井揆博本会副会長が明解な解説と案内をされました。午後はバスで観音崎まで行き、青少年の村から弾薬庫、第一砲台まで見学しましたが、生憎の雨で途中 中断の止むなきに至りました。もう一回ぜひ最後まで見学したいという要望が強く、再度11月24日(土)、横須賀軍港の見学を合わせて横須賀軍港・観音崎砲台群見学会が行われました。

○横須賀軍港・観音崎砲台群戦跡見学に参加して 保存の会会員 下村欣也

記録を見ると、2004年11月14日に実施された貝山地下壕・猿島砲台群戦跡の見学会に参加している。今年9月に行われた横須賀軍港・猿島軍港群見学会には所要のため参加できなかったところ、後半豪雨のため中断されたとのことであった。この度11月24日に継続的に催された横須賀軍港・観音崎砲台群見学会に参加し、横須賀軍港では「軍港めぐりクルージング」に一般客とともに乗船し、数日前入港した問題のG・ワシントン、イージス艦、潜水艦、救助母艦、対空防衛(迎撃)機能を持つ配備艦艇群など、海上自衛隊側に直列・並列的に繋留されたイージス艦を含む護衛艦群、給油作業、退役した南極観測船しらせ、さらに広い港湾施設群などを望見した。接岸した巨大な空母はこちらとの距離と方向、手前の繋留艦により、その全容は見えなかったが、今更ながら大艦巨砲時代と全く異なる様相を見、概観では分からない超高性能化を察し、大分以前の港湾内海水の放射能汚染の分析データ捏造事件を思い出した。乗船前の新井先生の懇切なご解説で往時(歴史と変遷)を偲び、乗員がアナウンスした簡潔な港湾設備、艦船のガイドで現在の一端を知ることができた。それにしても旧帝国海軍時代は勿論、現代の近隣各国などでも軍施設への接近や見物をこれほど許すとは思われない。

別の時聞いた呉と舞鶴の肉じゃが元祖争いに対し、横須賀は海軍カレーで売り出したなどは平和な時代のエピソードであろう。横須賀へ来ると何となくカレーの匂いがするような先入観による錯覚やレトルト食品の手みやげなどに触れるのは蛇足である。

昼食後今回も雨模様となったが、観音崎要塞跡地区では新井先生の入念に用意された解説により、堡塁、砲座、火薬・弾薬庫ほか付属施設の遺跡(遺構)を見学した。生憎の風雨の中、資料を広げることすら出来ず、また視界不良と高い木立の中で方角感覚、現在位置、海を俯瞰する広い立地状況をつかむことはできなかった。形状、構造、俯瞰位置などを比較的把握しやすい猿島砲台跡を思い出す堅固な赤煉瓦づくりの堡塁、砲台跡が残存した。

赤煉瓦建築は明治期から大正期建築の軍施設(司令部、兵営、弾薬、資材収納庫ほか多種)、旧制高校・大学の校舎・鉄道高架線アーチ・大都市駅舎、公共的建物(軍事目的でない横浜赤煉瓦倉庫群もその一例)などに多く見られるが、一般に明治期のものがより入念、精巧に造られていると聞く。大砲、観測機材など関連設備の撤去後よく残存するものと再開発、公園化整地などで地形変化、埋没、痕跡化しているものまである。建物では全国に計画的によく史跡的保存ないし各種施設(展示館、博物館、学校、市政や商業用途など)に現用されている場合も多く見られる。私の国元に近い旧舞鶴軍港都市でも(現海上自衛隊施設への転用は別として)赤煉瓦倉庫群がそのように利用され、過疎化に悩む地方都市の観光振興策の一助となっているが、本会はじめ全国戦績保存の会に見る目的と意義付けは非常に薄い気がする。戦没船員の碑では日本郵船歴史博物館で同社殉難船員の記録を以前見たのを思い出したが、「安らかにねむれわがともよ 波静かなれとこしえに」のモニュメントを前に一入の哀感が胸に迫った。軍、民間問わず、戦争犠牲者からの恩恵ともいべき長い戦後理念を無視ないし忘却し、世界情勢のもとに短絡した論議が横行するなか、他方無知(識)、無関心な人も多い世相と世代交代の中で嘗ての国粋主義、軍国主義(教育)に懲りた世代の一員として先行きに危惧を覚えている。

戦争遺跡見学会の資料紹介 (第1回)

日吉台地下壕保存の会では、第16回(2008)横浜・川崎平和のための戦争展のプレイベントとして横須賀の戦争遺跡見学会を08年9月21日(日)に行いました。午前中の猿島見学会は出来ましたが、午後に予定していた観音崎砲台群の見学会は雨で中止、後日再開を約して散会しました。

再度の見学会は、「まぐろ塚をつくる会」と共催で11月24日(月、振替休日)に行いました。午前中は、横須賀軍港めぐりを、午後は観音崎砲台群見学会をしました。今回も午後になると雨になりましたが強行実施いたしました。貴重な内容からして会員の皆さんには、前回とあわせて案内をしていただいた本会副会長新井揆博氏が作成した見学会資料を写真など挿入して提供いたしますのでご覧下さい。また機会を見て見学会を開催したいと思っておりますのでお楽しみにして下さい。

1 猿島見学

見学会行程 (9月21日)

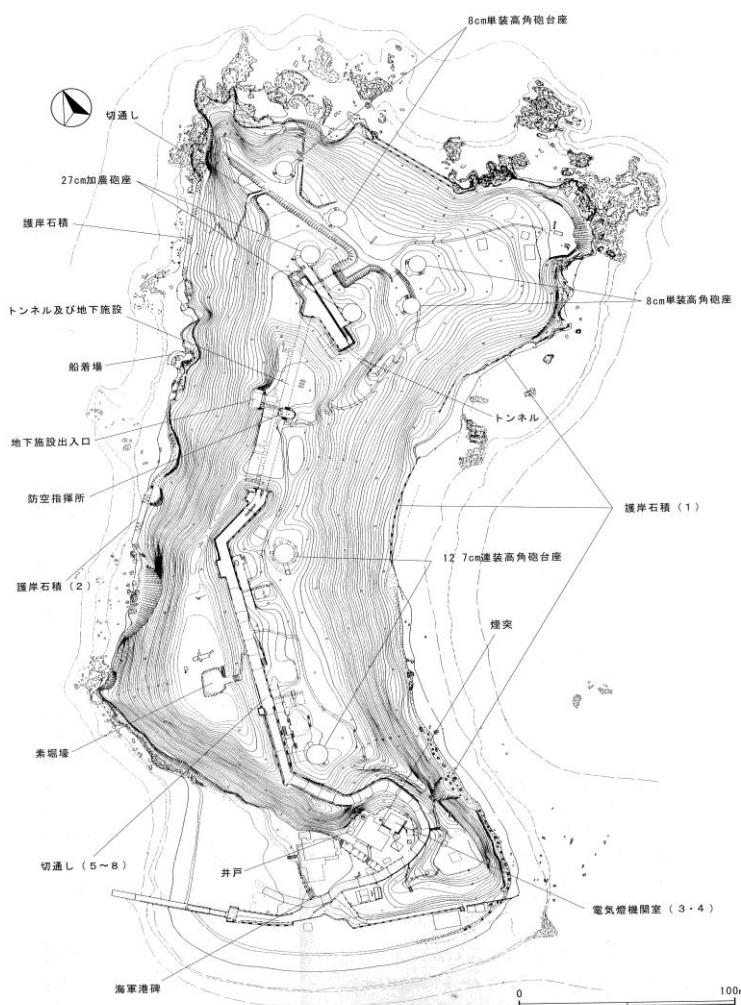
*横須賀中央駅集合(9:00)→三笠港発(10:00)→猿島栈橋着(10:15)→猿島見学(10:15~11:45 管理事務所近辺でガイダンス・発電機室・露天掘り・第二砲台・トンネル・第一砲台・8cm単装高角砲台座・防空指揮所・12.7cm連装高角砲台座など)休憩所近辺で昼食→猿島栈橋発(12:15)→観音崎栈橋着(12:35)
観音崎バス停近辺でガイダンス(12:45)→青少年の村・弾薬庫など(13:00)→観音崎第一砲台(13:30) 雨のため中止散会

猿島の略年表

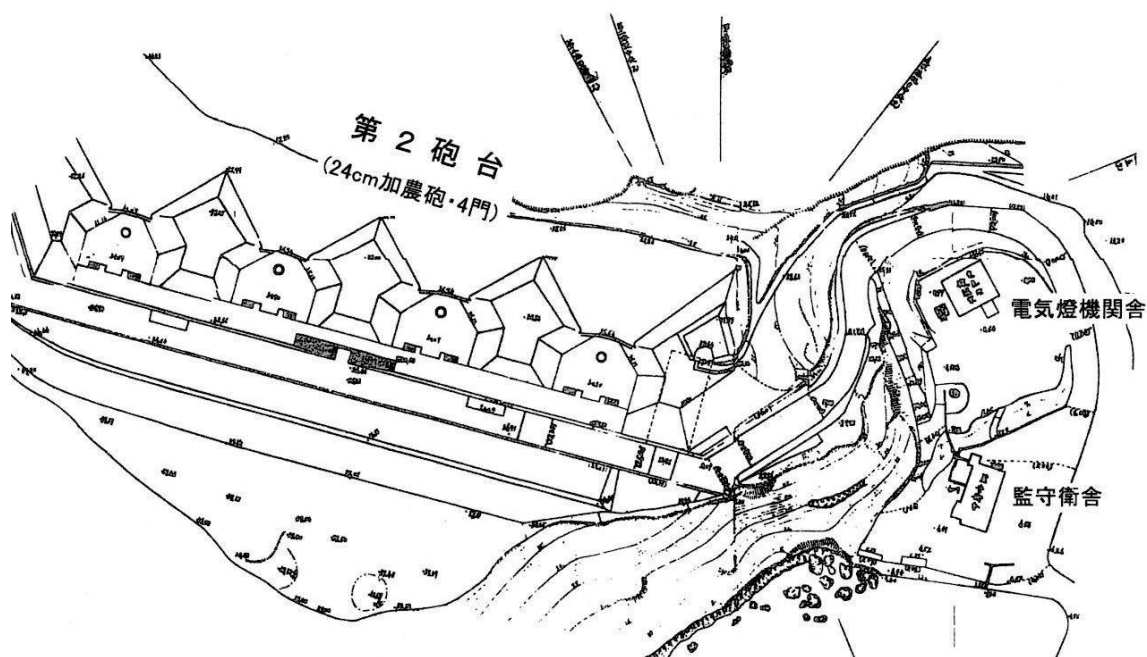
7000~8000年前(縄文時代)	山頂部の地表から縄文土器片・石器を採集
1800年前(弥生時代)	猿島洞窟内地中混貝層から弥生後期の土器片・動物の骨片・焚き火跡・鹿角製の針、石包丁など発見
AD300年頃	猿島洞窟内から土師器片や須恵器片発見、また奥壁の小窟に人骨がばらばらの状態で出土
1253(建長 5)年	日蓮上人房総から鎌倉へ船で渡った際、嵐に遭い猿島に漂着、日蓮上人の渡海伝説が生まれる
1846(弘化 3)年	アメリカ使節ビートル浦賀に来航、
1847(弘化 4)年	江戸幕府、猿島に台場3ヶ所築造 大輪戸台場 大筒6挺、 亥の崎台場 大筒6挺、 卯の崎台場 大筒3挺 合計大筒15挺設置
1853(嘉永 6)年	ペリー艦隊黒船四隻浦賀に来航久里浜に上陸、米国大統領の親書を渡す
1854(安政 元)年	ペリーの率いる米艦七隻来航、日米和親条約締結
1855(安政 2)年	安政地震により3ヶ所の台場(大輪戸・亥の崎・卯の崎)崩落、壊滅的被害をこうむり、幕府は猿島台場を放棄
1877(明治10)年	海軍省の管理下におかれ、横須賀港は海軍港に指定 「海軍港碑」設立(軍の施設として初めての建造物) 東南端は猿島 西北端は夏島
1881(明治14)年	陸軍省の所管となり、猿島要塞築造に着手
1884(明治17)年	猿島要塞完成、フランス積みレンガ造りによる本格的洋式要塞、春日神社を三春町に移し一般人の立ち入り禁止
1892(明治25)年	24cm カノン砲フランスから四門輸入配置(第二砲台)
1894(明治27)年	27cm カノン砲二門を追加配置(第一砲台)
1899(明治32)年	要塞地帯法公布、猿島は東京湾要塞司令部に属す
1923(大正12)年	関東大震災(9月1日)により露天掘りの幹道・兵舎・砲台の一部など破壊したため除籍される
1925(大正14)年	陸軍省猿島要塞を放棄海軍省に移管、海軍要塞となる
1941(昭和16)年	防空砲台へと役割を変え高角砲(高射砲)5座配備 当初は8cm 単装高角砲(四門)後に12.7cm連装高角砲(二門) 山頂に観測所が設けられ探照灯も配備される
1945(昭和20)年	終戦、大蔵省(財務省)管財局の所管となり軍事施設としての猿島の歴史が終わる

猿島要塞

横須賀市埋蔵文化財調査報告書第9集『猿島遺跡群』2002年3月 より



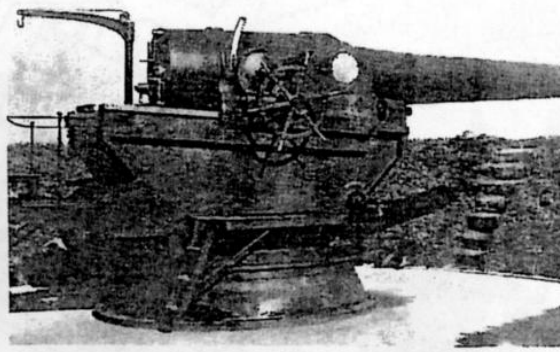
第7図 猿島の近代土木構造物・建造物位置図



東京湾防御猿島第二砲台司令所増築之図(防衛庁防衛研究所蔵)

猿島航路：(有) トライアングル「猿島参考資料」より

東京湾要塞建設当時、日本では国産で27cm加農砲を作る技術がまだなかったために、猿島ではフランスのカネー社製27cm加農砲が設置された。2基ある砲座の間には弾薬庫から砲弾を引き揚げる揚弾筒がある。おそらく手動式の滑車で引き揚げたものだろう。弾薬庫はレンガ積のカマボコ型で、壁面に漆喰が塗られているが、これは後の海軍時代に塗られた可能性がある。また壁面には間仕切があったと思われる痕跡が見られる。



加(カネー)式28口径27糧加農砲主要諸元
砲身長：7.68m
高低射界：-5°～+30°
弾量：216kg
初速(秒速)：490m
最大射程：1万1250m

23口径24糧加農砲主要諸元

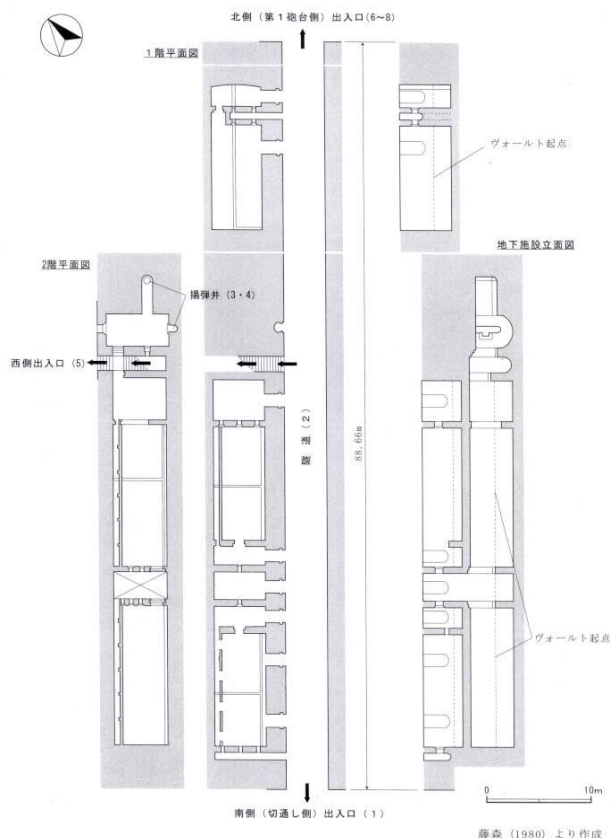
弾量：堅鉄弾150kg、榴弾125.8kg
高低射界：高架-8°～+32°
低架-10°～+16°
初速(秒速)：堅鉄弾435m、榴弾470m
最大射程：9000m

上の写真は猿島砲台のものではないが、同種の砲が第2砲台に4門が設置されていた。

加式28口径27糧加農砲

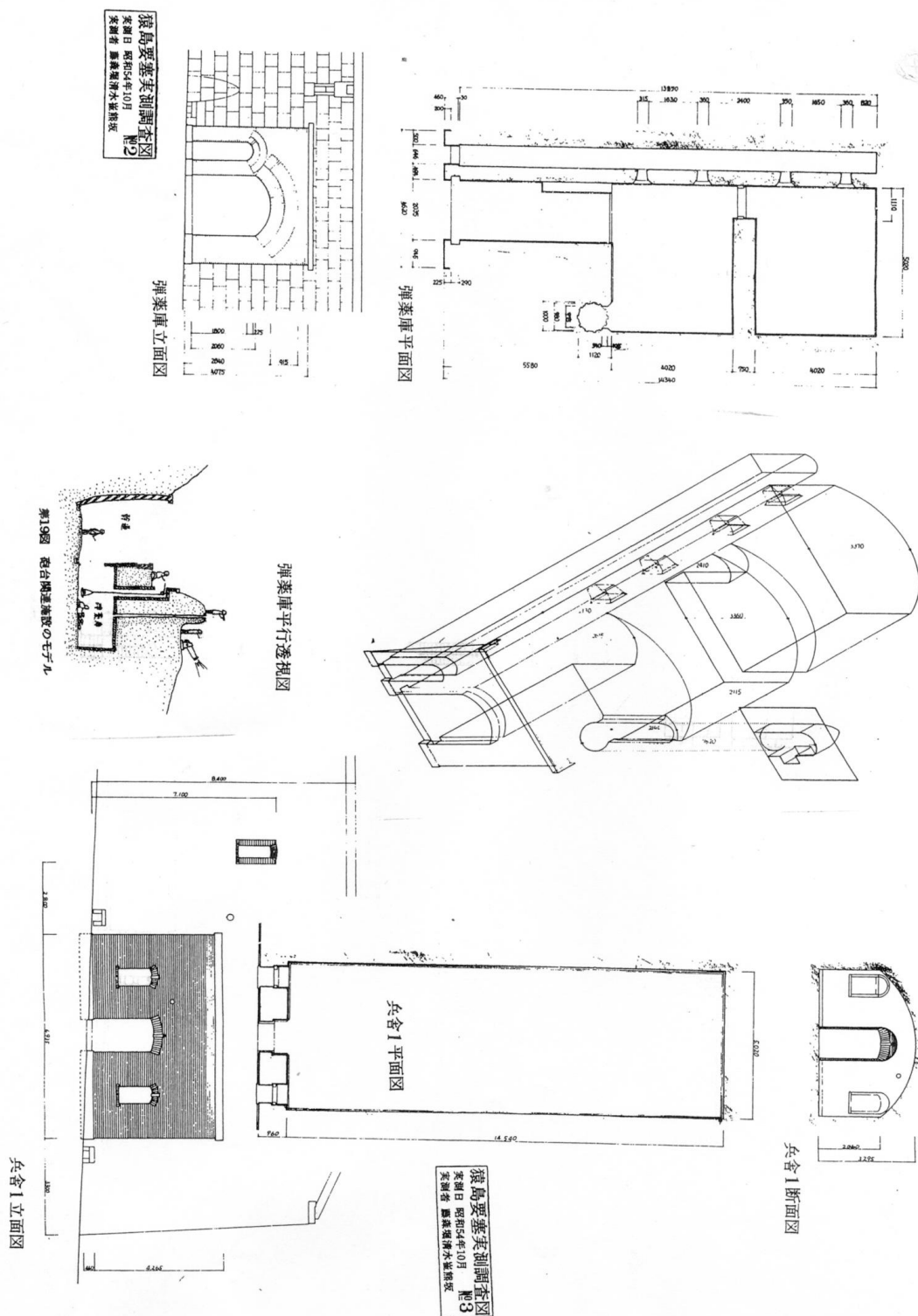


猿島航路：(有) トライアングル
「猿島参考資料」より



第9図 トンネル・地下施設平面図・立面図

横須賀市埋蔵文化財調査報告書第9
集『猿島遺跡群』2002年3月 より



横須賀市埋蔵文化財調査報告書第9集『猿島遺跡群』2002年3月 より



切通し右側レンガ部分兵舎



トンネル内部、第1砲台に向って



8cm 単座高角砲座

『慶應義塾史事典』に載った上原良司の学生証

亀岡敦子

2008年11月、慶應義塾創立150年を記念して『慶應義塾史事典』が出版された。分厚い事典の「学生証」の項目に、「戦前の学生証」というキャプション付で載っている写真の学生証は、昭和18年に徴兵され20年5月、特攻隊員として戦死した上原良司のものだ。『きけわだつみのこえ』に収められた上原の「所感」は、遺族からお借りして、横浜・川崎平和のための戦争展で何度か展示したことがある。事典の編纂委員は、戦前の学生証を探し続けていたらしいが、卒業時に学生証は返却するので、当然のことながらどこからも提供はなかった。諦めかけていた頃、別の用件で上原家を訪ねた委員の一人が偶然見つけたものだ。

学生証を読むと、経済学部予科3年D組、有効期間昭和18年4月から9月となっている。上原たちは10月から本科に進んだはずであるから、このいまにも笑い出しそうな横顔の写真が貼られた学生証が、安曇野市の生家に残されていたということは、何を意



上原良司の学生証(慶應義塾史事典 p 435 より)

味するのだろうか。間もなく学園を去ることが決まっていたこの学年の学生たちには、本科の学生証は作られなかったのだろうか。

ともあれ、塾長小泉信三の文字のある昭和18年発行のこの学生証が語るのは、持ち主が不幸にも戦死し、戦後の新しい学生証と交換することができなかった事と、幸いにも空襲にあわなかったことで消失することなく、遺族が大切に保管していたということである。千ページにも及ぶこの事典はおそらく遠い未来まで、大切に残される一冊となるであろう。偶然とはいえ、平穏な時代の幸運な学生のものよりも、慶應義塾150年の歴史の中でも、もっとも多難な時代の不運な学生の学生証が、載せられた事は意義があると思える。

なお、上原の「所感」は「未来をひらく福澤諭吉展」の展示品のひとつとして、3月8日まで上野の国立博物館表慶館で展示されており、その後福岡と大阪でも巡回展示される。

寄稿

海軍省の理事生の頃

越沢 正子

先日は見学会に参加させて頂き有難うございました。お役に立てたとも思えませんのにお茶まで御馳走になり申訳ございませんでした。

下手な文で申訳ございませんが思い出すまゝ少しでも綴らせていただきます。

やがて数ヶ月で運命の日を迎えるとも知らず、昭和二十年四月海軍省の理事生に採用されました。今で思えば最後の理事生です。

誇をもって霞ヶ関の海軍省に入り、人事局仕官補任係と云う部署に配置になりました。

海軍省の理事生としての心構え等の教育の一環として新入生一同日比谷公園の中の広場で手旗信号を習ったのを覚えて居ります。

どの位霞ヶ関に通ったのでしょうか、間もなく日吉の壕の中での仕事が始まりました。六十三年振りの日吉駅前の並木はあれ程鬱蒼と茂っては居りませんでしたがかなり大木であった様に思われます。こゝを毎日通ったと思うと感慨深いものがありました。

壕の中の空気は数十年たったにも変わらず壁側に机が並んで仕事をしていた記憶をよみがえらせてくれました。

私の仕事は主に予備学生の方々が「回天」に乗り敵艦に体当たりして行く「回天乗組を命ず」と云う辞令を書き留めておく事だったと思います。今で思えば何もわからず上からの命でしていた事とはいえ、何だか申し訳ない気持で一杯です。

朝、壕の中に入り、昼食のため地上の食堂への行き帰りだけ外の空気を吸い、又壕に入る生活でしたが、壕の中は明るく別に不自由はありませんでした。上司であった大尉の方、直接色々教えて下さった属のかた、板張りの床を歩く音と共に思い出される方々です。

たまたま終戦の日には休暇をいただいて家族の疎開先に行って居り、一日位経ってから帰って参りましたら士官の方は皆さん丸腰であのスマートな剣を下げた面影もなく、書類を焼く煙を垣間みて、あゝ日本は負けたのだと思いました。

だんだん記憶も薄れて参りますが、今八十年の人生を顧りみて数ヶ月ではありましたがあの日吉の壕の中の事は色濃く忘れる事の出来ない一頁です。

お役に立たない事を書き並べましたが壕保存会の皆様に感謝し、今後のご活躍とご発展をお祈り申し上げます。

寄稿

敗戦から六十三年、慶應日吉キャンパス地下壕見学会に参加し
戦争中の私、少年時代を思い一筆

近松 欽弥

私・旧制中学二年 十五才

父・鉄道員 四十二才

六十三年ぶり、二〇〇八年十月池袋へ……我が家のあった焼跡に立つ。今は駐車場に成っていた。目をつぶり当時を思う。学校へ行っても勉強がなく毎日防空壕掘り、防空演習でした。

『逃げろ』父の声に家の外へ飛び出る。四月十三日夕暮、春とはいえまだ寒かったのをおぼえる。此の所毎日の空襲におびえ靴をはき、まどろんでいた。空を覆いつくす B29 の大編隊に驚いた。南の空は真赤。熱風が吹く。爆風による窓ガラスの割れる音。焼夷弾が雨の様に降ってくる、もの凄さだ。アスファルトの地面に落ちると火を吹き十米位飛び飛び跳ねる。当っ

たら即死である。父と二人中仙道と川越街道の交わる四ツ辻へ行く。

〔それまでの防火訓練の何と役に立たない事か、「火はたき」「バケツリレー」〕

右から、左からの人、何百何千と云う人人人、何処へ逃げるのか分からず。目の前に倒れる人、転ぶ人の続出。踏越え、飛び越え、ただ夢中で走っていた。阿鼻叫喚とはこの事なのか。鉄兜で水を被り、火の粉を避けながら。一晚中道の両側の電信柱は松明の様に燃えていた。

〔父は鉄道に勤めていたせいか兵隊にはいかなかった様だ。警察官、消防官も国防の為か割りと行かなかったのかな〕

朝靄の中焼跡に戻って来る。見渡すかぎりの焼野原。買溜めの缶詰はパンパンに膨れ、ビン、瀬戸物はぐにやぐにやに溶けていた。地面を掘りかえすと「ぼ」と燃え残りの布切に火が走る。みんなの顔も服もススで真黒。

食べ物を探しに池袋駅に、何かあるだろう。「鉄道購買部」の倉庫の中、米があられの様になっていた。

今の自分を振り返り、何と云おうか、昨日の自分と違うあさましい姿でした。

畜生 今にみていると叫びながら。

〔当時 小学生は防空ズキン

中学生は鉄兜を被ったので大人に成った様な気がした。

中学生は五年制でしたが、少年志願兵に成ると四年で卒業出来た〕

企画

地下壕ガイドから一言

喜田美登里

地下壕見学会の受付窓口をしています喜田です。慶應日吉キャンパスの中で地下壕見学会を続けていますと、銀杏並木の春の芽吹き、晩秋の黄金色の落ち葉のシャワーなど、美しい季節ごとのキャンパスも楽しめます。年が明けた銀杏並木は冬空の下、すっかり裸木になっています。銀杏と共に又、見学会の一年も始まります。

昨年最後の見学会は、12月22日洗足学園高校1年生と先生の12名でした。私たちガイドは新井先生はじめ、7名。年明け1月20日、日吉南小学校6年生と先生84名を9名で案内しました。いつもこんな人数で案内できるわけではありませんが、現在、地下壕のボランティアガイドは10名を越えました。2005年から3年間「戦争遺跡ガイド養成講座」を企画し、沢山の方に参加していただいて、共に学んだ成果としてこんなに保存運動への参加者・ガイドの仲間が増えています。

様々な「見学」のガイドは普通1~2名なので、ちょっと驚かれたりもしますが、私たちは日吉の戦争遺跡を案内・紹介していく方法を共に勉強し、模索中なので都合がつく人は参加するようにしています。もちろん、複数のガイドは見学会の進行・安全面で必要な事でもあります。見学会は年間50回位になりますが、仕事でウィークデイの案内ができない人は月1回土曜日の定例見学会に参加しています。

これからも、学習会・講演会・ガイド講座を企画していきます。どうぞご参加ください。

活動の記録 (2008年9月～2009年1月)

- 8/30 定例見学会 57名 会報89号発送(慶應高校物理教室)
- 9/5 地下壕見学会 矢上婦人会 48名
- 9/12～14 日吉地区センターの開館30周年記念文化祭に展示参加(9/11準備作業)
- 9/21 新井さんと歩く神奈川の戦争遺跡 猿島・観音崎砲台群 35名
- 9/24 平和のための戦争展実行委員会(法政第二高校)
- 9/25 地下壕見学会 世田谷市民大学 30名 運営委員会(慶應高校物理教室)
- 9/27 定例見学会 63名
- 10/2 航空本部地下壕(Bブロック)についての現場視察・相談会(9月下旬に日吉キャンパスまむし谷の体育館建設予定地でBブロック入口が発掘された件で 慶應義塾、建設会社、神奈川県・横浜市の文化財課、保存の会が参加)
- 10/4 「日吉フェスタ 2008」に展示・書籍、ねり飴販売で参加(ヒヨシエイジ主催の地域活性化プロジェクト 慶應日吉キャンパス来往舎イベントテラスと並木道で地域住民と学生がパフォーマンスや餅つき等のブースを出展)
- 10/9～11 第16回横浜・川崎平和のための戦争展2008開催(慶應大学日吉キャンパス来往舎 主催 横浜・川崎平和のための戦争展実行委員会) 展示・若者の発表・シンポジウム 参加者300名 (10/8準備作業)
- 10/9 日吉台小学校6年生の「戦争体験を聞く会」に参加
- 10/21 地下壕見学会 さいかちの会 27名
- 10/23 運営委員会(慶應高校物理教室)
- 10/25 定例見学会 51名
- 10/27 地下壕見学会 いざ鎌倉の会 42名
- 10/30 地下壕見学会 大師高校1年 20名
「サンデー毎日」取材(保阪正康氏の連載記事)
- 11/11 地下壕見学会 荒川区退職教職員会の会 26名
- 11/14～15 「HRP2008(Hiyoshi Research Portfolio2008)「知」をめぐる社会との交流・協働の場」(慶應大学日吉キャンパス)
慶應義塾創立150周年企画「日吉の過去・現在・未来」地誌から見た日吉講演会・展示・地下壕見学会で参加 地下壕見学会 41名
- 11/18 運営委員会(日吉地区センター)



航空本部地下壕入口



展示・ねり飴販売ヒヨシエイジ

- 11/24 新井さんと歩く神奈川の戦争遺跡ツアー 横須賀軍港廻り・観音崎砲台群
☆ 9月21日の「猿島・観音崎砲台群・戦没船員の碑」ツアーの後半が雨になっ
たため、当日の参加者で再度行いました 15名
午後の見学は「まぐろ塚の会」22名も参加
- 11/26 地下壕見学会 セカンドライフクラブ 34名
- 11/28 地下壕見学会 浅野学園歴史研究部 15名
TBS「イブニング5」取材(12/12放送)
- 11/29 定例見学会 55名
- 12/2 地下壕見学会 駒林小学校6年生 68名
地下壕見学会 慶應大学英語クラス(笹沼先生) 15名
- 12/3 地下壕見学会 神奈川県退職女教師の会 55名
- 12/8 地下壕見学会 矢上小学校6年生 72名
- 12/10 地下壕見学会 横浜国大付属横浜小学校6年生 43名
- 12/13 定例見学会 33名
- 12/15 地下壕見学会 篠原小学校 6年生 111名
- 12/17 運営委員会(慶應高校物理教室)
- 12/22 地下壕見学会 洗足学園高校 12名
- 1/18 横浜空襲を記録する会との合同研究会
(米軍航空写真に見る日吉台方面の空襲について等)
- 1/20 地下壕見学会 日吉南小学校6年生 84名
(小学校の見学会が12月に集中!戦争の学習をしている時期です。)



見学会の様子

予 定

- 1/24 運営委員会 会報90号発送(慶應高校物理教室)
定例見学会(土曜日) 1/24・2/28・3/28・4/25

定例見学会は毎月第4土曜日に行っています。なお日程が変わる場合もありますので必ず見学窓口に申し込んでください。

(見学申込先 TEL&FAX 045-562-0443 喜田)

連絡先(会計) 亀岡敦子: 〒223-0064 横浜市港北区下田町 5-20-15 TEL 045-561-2758
(見学会・その他) 喜田美登里: 横浜市港北区下田町 2-1-33 TEL 045-562-0443
ホームページ・アドレス: <http://hiyoshidai-chikagou.net/> (新アドレス)

日吉台地下壕保存の会会報 (年会費) 一口千円以上
発行 日吉台地下壕保存の会 郵便振込口座番号 00250-2-74921
代表 大西章 (加入者名) 日吉台地下壕保存の会
日吉台地下壕保存の会運営委員会